

展示室1 ウィリアム・ブレイク特集

民芸運動の創始者・柳宗悦(1889-1961)が傾倒したことで日本でも知られるようになったウィリアム・ブレイクは、同時代には一部の支持者を除いて大きな評価を得ることはなく、独自の哲学、宗教観、美意識の表現者であり続けました。幻視の能力を持つと語り、狂人扱いされることもあった彼の芸術は、20世紀になってようやく評価されたといえるでしょう。

今回の特集では、英国ロマン主義の先駆とも称されるブレイクの奇想の芸術をお楽しみいただきます。また彼と同時期に活躍した画家たちの作品を中心に、英国美術の流れをご覧ください。

| 作者名 | シリーズ名 | 作品名 | 制作年 | 技法・材質 |
|------------------------|----------------|--|----------|--|
| ジョゼフ・マロード・ウィリアム・ターナー | | カンバーランド州のコールダー・ブリッジ | 1810 | 油彩・キャンバス |
| サー・ジョシュア・レイノルズ | | エグリントン伯爵夫人、ジェーンの肖像 | 1777 | 油彩・キャンバス |
| サー・エドワード・コリー・バーン=ジョーンズ | | フローラ | 1868-84 | 油彩・キャンバス |
| サー・トマス・ローレンス | | ラビー・ウィリアムズ牧師 | 1790年代初頭 | 油彩・キャンバス |
| ジョン・マーティン | | フレッシュウォーター・ベイ | 1815頃 | 油彩・キャンバス |
| ジョン・コンスタブル | | デダム谷 | 1802 | 油彩・紙、キャンバス |
| トマス・ゲインズボロ | | オース夫人の肖像 | 1767 | 油彩・キャンバス |
| ジョン・ウィリアム・ウォーターハウス | | フローラ | | 油彩・キャンバス |
| ウィリアム・ブレイク | | 眠るダンカン王に近づくマクベス夫人 | | 水彩、インク・紙 |
| ウィリアム・ブレイク | 『墓』(ロバート・ブレア作) | | 1808 | エッチング、ラインエングレーヴィング・紙/本 |
| ウィリアム・ブレイク | 『ヨブ記』挿絵 | | 1825 | ラインエングレーヴィング・紙/ポートフォリオ |
| | | 扉、ヨブとその家族、神の玉座の前のサタン、サタンによるヨブの息子たちと娘たちの破滅、 ヨブにその不幸を告げる使者たち、主の御前から進んで行くサタンとヨブの施し、腫物でヨブを撃つサタン、 ヨブを慰める人たち、ヨブの絶望、エリバズの幻視、三人の友によって難詰されるヨブ、ヨブの悪い夢、 エリフの弁論、この時、主はつむじ風の中からヨブに答えられた、天地創造、ベヘモトとレヴィアタン、 サタンの墜落、キリストの幻、ヨブの燔祭、施しを受けるヨブ、ヨブと娘たち、繁栄を回復したヨブとその妻 | | |
| ウィリアム・ブレイク | ダンテの『神曲』のための連作 | 好色な人々の園谷：パオロとフランチェスカ 腐敗した役人の囊：チャンボロを痛めつけるサタン 腐敗した役人の囊：互いに引き裂き合うサタン 盗人たちの囊：六本足の蛇に襲われるアニコロ・ブルネレスキ 盗人たちの囊：蛇に襲われたプロゾ | 1826-7 | ラインエングレーヴィング・紙 ラインエングレーヴィング、ドライポイント・紙 ラインエングレーヴィング・紙 ラインエングレーヴィング、ドライポイント・紙 ラインエングレーヴィング、ドライポイント・紙 |
| ウィリアム・ブレイク | | 偽善者たちの囊：悪臭に鼻を覆うダンテとヴァージル 背信者たちの園谷：ポッカ・テリ・アパーテを踏みつけるダンテの足 | | ラインエングレーヴィング、ドライポイント・紙 ラインエングレーヴィング、ドライポイント・紙 |
| ジョン・マーティン | | ノアの大洪水 | 1828 | メゾチント・紙 |

展示室2 福島ゆかりの日本画

日本の家屋で設えとして飾られてきた屏風や掛け軸、そしてそれらに用いられてきた墨や岩絵の具で描かれた絵画を日本画と呼びます。ここでは戦前から現代まで、福島ゆかりの画家の作品をご紹介します。郡山市内では、戦後の日本画教育に偉大な功績を遺した安藤重春、その下で学び、東京藝術大学日本画科へ進んだ黒沢吉蔵、そして安積郡多田野村(現・郡山市逢瀬町多田野)出身で、戦前期の日本と中国で美術研究会を組織し、各地で展覧会の開催に尽力した渡邊晨畝の作品を展示します。

福島ゆかりの画家たちによる、歴史的なテーマや美しい花鳥画、風景画をお楽しみください。

| 作者名 | 作品名 | 制作年 | 技法・材質 |
|-------|-----|-----------|--------------|
| 須田 珙中 | 鷹の図 | | 岩絵具・紙/二曲一隻屏風 |
| 荻生 天泉 | 行成卿 | 1932(昭和7) | 岩絵具・紙/二曲一双屏風 |

| 作者名 | 作品名 | 制作年 | 技法・材質 | |
|--------|-----------|------------------|----------------|----------|
| 常盤 大空 | 古代頌 | 1960(昭和35) | 岩絵具・紙(2点組) | 常盤房子氏寄贈 |
| 菊地 養之助 | 鳩のいる家族 | 1962(昭和37) | 岩絵具・紙 | 菊地一郎氏寄贈 |
| 菊地 養之助 | 野の花 | 1976(昭和51) | 岩絵具・紙 | 菊地一郎氏寄贈 |
| 湯田 玉水 | 夏山驟雨・晩秋暮鴉 | | 墨、岩絵具・絹/二曲一双屏風 | |
| 酒井 三良 | 春池小景 | 1926(大正15) | 岩絵具・絹/二曲一隻 | |
| 安藤 重春 | 犬声 | | 岩絵具・紙 | 安藤ヒサヨ氏寄贈 |
| 安藤 重春 | あんず | 1932-37(昭和7-12)頃 | 岩絵具・絹 | 安藤重春氏寄贈 |
| 黒沢 吉蔵 | 晩秋の山河 | 1975(昭和50) | 岩絵具・紙 | |
| 渡辺 晨畝 | 松上に鶴 | | 絹本着色 | |
| 渡辺 晨畝 | 溪流に鶴 | | 絹本着色 | |

展示室3 フロンティア精神のひとびと

2024年、郡山市は市政施行100周年を迎えました。明治12年に着工された安積疏水開削は、明治政府の国営第1号農業利水事業であり、郡山市発展の礎となりました。その大きな原動力となったフロンティア（開拓者）精神は、今日まで脈々と受け継がれています。

ここではひとつの試みとして、新たな分野の開拓という視点から、当館の日本近代美術のコレクションを中心に作品を紹介します。安積開拓の時代に通じる、日本の油彩画の黎明期に活躍した高橋由や亀井至一・竹二郎兄弟らの貴重な作品をはじめ、日本の水彩画隆盛の礎を築いた三宅克己や大下藤次郎らの作品をご覧ください。また、戦後日本のガラス工芸界において、その地位を高めた第一人者である郡山出身のガラス工芸家佐藤潤四郎の仕事を紹介します。

2024年7月、郡山市出身の作曲家湯浅讓二氏が逝去されました。生涯前衛でありつづけ、実験的フロンティア精神を貫きながら、世界を舞台に活躍された湯浅氏を追悼し、貴重な楽譜などを特別展示いたします。

| 作者名 | シリーズ名 | 作品名 | 制作年 | 技法・材質 |
|--------|---------------------|---------------------------|-------------|--------------------|
| 高村 真夫 | | 風景 | 1903(明治36) | 油彩・キャンバス |
| 三宅 克己 | | 渋谷村天現寺附近の茶店 | 1893(明治26) | 水彩・紙 |
| 大下 藤次郎 | | 赤城駒ヶ岳の紅葉 | 1907(明治40) | 水彩・紙 |
| 石川 欽一郎 | | 牛荘(ニューチョワン) | | 水彩・紙 |
| 高橋 由一 | | 風景(鳥海山) | 1880代 | 油彩・キャンバス |
| 諫山 麗吉 | | 甲州猿橋 | | 油彩・キャンバス |
| 浅井 忠 | | 収穫 | 1893(明治26) | 油彩・紙・板 |
| 亀井 竹二郎 | 石版『懐古東海道五十三驛真景』油彩原画 | 興津驛 清見寺三保松原遠望 | | 油彩・紙 |
| 亀井 竹二郎 | 石版『懐古東海道五十三驛真景』油彩原画 | 川崎驛 六合川眺望 | | 油彩・紙 |
| 中川 八郎 | | 秋郊 | | 水彩・紙 |
| 大下 藤次郎 | | 晩秋 | 1908(明治41) | 水彩・紙 |
| 三宅 克己 | | 箱根 | | 水彩・紙 |
| 佐藤 潤四郎 | | 奈良・薬師寺玄奘三蔵院舍利器カバー(控) No.1 | 1984(昭和59) | ガラス/宙吹・プランツ、雲母封入 |
| 佐藤 潤四郎 | | ルーマー杯・なみなみのワインを | | ガラス/宙吹・グラヴェール、プランツ |
| 佐藤 潤四郎 | | 奈良・薬師寺玄奘三蔵院舍利器(控) No.1 | 1980(昭和55) | ガラス/宙吹・カット |
| 佐藤 潤四郎 | | タンブラー(20点) | | ガラス/型吹ほか 佐藤久枝氏寄贈 |
| 佐藤 潤四郎 | カガミクリスタル製作 | 手吹きウイスキーボトル《スーパーニッカ》初号モデル | 1962(昭和37)頃 | ガラス/宙吹 川崎清氏寄贈 |
| 佐藤 潤四郎 | | ブルー花器 | | ガラス/宙吹 |
| 湯浅 大太郎 | | 欧州スケッチ帖 | 1918(大正7) | 水彩・紙 |
| 湯浅 讓二 | | 「ピアノのためのプロジェクト・エセムプラスチック」 | 1961(昭和36) | ペン・紙 |
| 湯浅 讓二 | | 「ヴィオラとオーケストラのための啓かれた時」より | 1986(昭和61) | 鉛筆・方眼紙 |
| 湯浅 讓二 | | 「始原への眼差II」より | 1992(平成4) | 鉛筆・方眼紙 |
| 湯浅 讓二 | | 「交響組曲「奥の細道」より | 1995(平成7) | 鉛筆・方眼紙 |

展示室4-① 浜田庄司とエリック・ギル

浜田庄司 (1894-1978) は柳宗悦の民芸運動に参加し、暮らしの中の工芸に美を見いだした陶芸家です。自らも素朴で力強い陶芸作品を数多く制作しました。

この運動に前後して、浜田はイギリスの木版画家・彫刻家のエリック・ギル (1882-1940) と出会います。ギルは自分の信条に基づき、都会の喧騒を離れて中世修道院の生活に倣った自給自足の暮らしをしていました。浜田はこの村に滞在するうちに、ギルの制作活動が日々の暮らしと根源的に繋がっていることに気づき、同じ芸術家として強い啓示を受けたのでした。

この部屋では、浜田が影響を受けたギルの本作りや 版画作品に注目します。合理化・効率化が求められた時代に、なおもテキストに寄り添った丁寧な装飾と挿絵を施したギルの手仕事をご覧ください。

| 作者名 | 作品名 | 制作年 | 技法・材質 | |
|-----------|---------------------------|-----------|------------|-------------|
| エリック・ギル | H. ペプラー 『悪魔の策略 (支配と奉仕)』 | 1915 | 木版・紙/本 | |
| エリック・ギル | 『十字架の道』 | 1917 | 木口木版/本 | |
| エリック・ギル | 『コモン・キャロル・ブック』 | 1926 | 木口木版/本 | |
| エリック・ギル | 『四福音書』 | 1931 | 木口木版/本 | |
| エリック・ギル | 磔刑 | 1931 | 木口木版 | |
| エリック・ギル | 降架 | 1931 | 木口木版 | |
| エリック・ギル | F. コーンフォールド 『秋の夜半』 | 1924 | 木口木版/本 | |
| エリック・ギル | 『深き淵の栄光の賛歌』 | | 木口木版/本 | |
| エリック・ギル | 『ニシ・ドミヌス』 | 1919 | 木口木版/本 | |
| ヒラリー・ペプラー | 『三人の賢者』 | 1929 | 木口木版/本 | |
| エリック・ギル | 『雅歌』 | 1925 | 木口木版/本 | |
| エリック・ギル | 『カンティクム・カンティコルム (ソロモンの歌)』 | 1931 | 木口木版/本 | |
| エリック・ギル | 『エリック・ギル版画集』 | 1929 | 木版、エッチング/本 | |
| エリック・ギル | 『詩歌集』 | 1925 | 木口木版/本 | |
| エリック・ギル | 『ザ・ゲーム』 | 1916-23 | 木口木版/本 | |
| エリック・ギル | E. クレイ 『誠実な恋人』 | 1934 | 木口木版/本 | |
| エリック・ギル | 『木版画集』 | 1924 | 木口木版/本 | |
| エリック・ギル | 『芸術と愛』 | 1927 | エッチング/本 | |
| エリック・ギル | 『ペトラにて』 | 1924 | 木口木版/本 | |
| エリック・ギル | D. ペプラー 『ドラゴンについて』 | | 木口木版/本 | |
| エリック・ギル | 『ウェルフェア・ハンドブック』 | | 木口木版/本 | |
| エリック・ギル | キリストと両替屋 | 1929 | 木口木版 | |
| エリック・ギル | 聖ルカ | 1922 | 木口木版 | |
| エリック・ギル | エヴァ | 1926 | 木口木版 | |
| エリック・ギル | イエズス会の殉教者 | 1923 | 木口木版 | |
| エリック・ギル | ゲッセマネの園におけるキリストの苦悶 | 1926 | 木口木版 | |
| 浜田 庄司 | 黒釉鑄流描角皿 | | 陶器 | 麻山富義氏寄贈 |
| 浜田 庄司 | 鉛釉花打茶碗 | | 陶器 | |
| バーナード・リーチ | 立杭 | | コンテ・紙 | |
| バーナード・リーチ | 壺 | 1934(昭和9) | 水彩・紙 | 株式会社名古屋画廊寄贈 |

展示室4-② クリストファー・ドレッサーの芸術

ドレッサー (1834-1904) は、工業化が進む 19 世紀後半のイギリスで活躍したインダストリアル・デザイナーです。植物学者としての経歴をもつ彼のデザインには、花や草木から着想を得た模様や形が多くみられます。また、万国博覧会などをとおして世界各國の工芸品に触れ、西洋の伝統にとらわれない斬新なデザインに挑みました。

なかでも日本に高い関心を寄せていたドレッサーは、1876 (明治 9) 年に来日を果たし、各地の窯場を巡って工芸品の造形や施釉技術などを調査します。帰国後はその成果を書物にまとめてヨーロッパに紹介するとともに、自らのデザインにも昇華させていきました。

新たなデザインへの道を切り拓いた、ドレッサー の重要な仕事の数々をご覧ください。

| 作者名 | 作品名 | 制作年 | 技法・材質 |
|---------------|-------------------|-----------|--------------|
| クリストファー・ドレッサー | クラレットジャグ（ぶどう酒用容器） | | ガラス、金属、電気メッキ |
| クリストファー・ドレッサー | クラレットジャグ（ぶどう酒用容器） | | ガラス、金属、電気メッキ |
| クリストファー・ドレッサー | スプーン・ウォーマー | | 金属、電気メッキ |
| クリストファー・ドレッサー | ミルク入れ | 1880 | 金属、電気メッキ |
| クリストファー・ドレッサー | 把手付き燭台 | | 真鍮、木製把手 |
| クリストファー・ドレッサー | 金銀彩植物模様タイル | | 磁器 |
| クリストファー・ドレッサー | ゴシック模様タイル | | 磁器 |
| クリストファー・ドレッサー | 金彩筒型三足花器 | | 磁器 |
| クリストファー・ドレッサー | 草花象嵌模様足付皿 | | 銀、銅、真鍮 |
| クリストファー・ドレッサー | 孔雀象嵌模様円形皿 | | 銀、銅、真鍮 |
| クリストファー・ドレッサー | 緑釉植物刻文花瓶 | 1892-95 頃 | 陶器 |
| クリストファー・ドレッサー | 緑釉植物刻文把手付花瓶 | 1892-95 頃 | 陶器 |
| クリストファー・ドレッサー | 緑釉刻文花瓶 | 1879-82 頃 | 陶器 |
| クリストファー・ドレッサー | 緑釉アカンサス型手付壺 | 1892-95 頃 | 陶器 |
| クリストファー・ドレッサー | 緑釉山羊面四耳壺 | 1892-95 頃 | 陶器 |
| クリストファー・ドレッサー | 水差し「ラクダの背」 | 1879-82 頃 | 陶器 |
| クリストファー・ドレッサー | 黄緑釉水差（一対） | 1892-95 頃 | 陶器 |
| クリストファー・ドレッサー | 彩釉刻文把手付扁壺 | 1879-82 頃 | 陶器 |
| クリストファー・ドレッサー | 黄緑釉アールヌーヴォー風装飾文皿 | 1892-95 頃 | 陶器 |
| クリストファー・ドレッサー | 花瓶（緑色クルーサ・ガラス） | | ガラス |
| クリストファー・ドレッサー | 瓶（緑色クルーサ・ガラス） | | ガラス |
| クリストファー・ドレッサー | 花瓶（赤色クルーサ・ガラス） | | ガラス |
| クリストファー・ドレッサー | プロペラ瓶（緑色クルーサ・ガラス） | | ガラス |
| クリストファー・ドレッサー | 色絵椿文龍花瓶（一対） | 1886 | 陶器 |
| クリストファー・ドレッサー | 緑釉龍波瀟文水差 | 1879-82 頃 | 陶器 |
| クリストファー・ドレッサー | 緑釉人物文扁壺 | 1879-82 頃 | 陶器 |
| クリストファー・ドレッサー | 色絵花模様大皿 | 1886 | 陶器 |
| クリストファー・ドレッサー | 色絵草花文隅切角皿 | 1886 | 陶器 |
| クリストファー・ドレッサー | ナイフとフォークのセット | | 金属、電気メッキ |
| クリストファー・ドレッサー | 日本風把手付き薬味入れ | | ガラス、金属、電気メッキ |
| クリストファー・ドレッサー | レター・ラック（円形、可動式） | 1881 | 金属、電気メッキ |
| クリストファー・ドレッサー | トースト・ラック（青海波） | 1879-82 頃 | 金属、電気メッキ |
| クリストファー・ドレッサー | 『植物学の手引き』 | 1860 | 本 |
| クリストファー・ドレッサー | 『装飾デザインの原理』 | 1874 | 本 |
| クリストファー・ドレッサー | 『日本—その建築、美術、工芸』 | 1882 | 本 |

ロビー展示 彫刻・他

| | 作者名 | 作品名 | 制作年 | 技法・材質 |
|----------|-------------|-----------|-------------|-------------|
| ●1階 | アントニー・ゴームリー | 領域 XIII | 2000 | ステンレス・スチール棒 |
| | アントニー・ゴームリー | 量子雲 XXIII | 2000 | ステンレス・スチール棒 |
| | 笠置 季男 | 躍進 | 1958（昭和 33） | セメント |
| ●2階展示ロビー | 北村 四海 | 井冰鹿の娘 | 1917（大正 6） | 大理石 |
| | 細川 宗英 | 道元 | 1988（昭和 63） | ブロンズ |
| | 柳原 義達 | 女の首 | 1958（昭和 33） | ブロンズ |
| | 堀内 正和 | 顔 | 1955（昭和 30） | 鉄、セメント |
| | 佐藤 静司 | 遙か | 1989（平成元） | ブロンズ |
| ●前庭 | バリー・フラナガン | 野兎と鐘 | 1988 | ブロンズ |